アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

《富士三保松原図屏風》
紙本金地着色　六曲一双
室町時代後期（十六世紀中頃）
各一三七・五×三一九・四㎝
（はごろもフーズ株式会社寄贈）

富士山と三保松原を描いた屏風は数多いが、本図は制作時期が室町時代に遡る貴重な作例。駿河湾側より望んだ視点で、右隻に富士山、左隻に清見寺や江尻宿、そして両隻をまたいで三保松原を描く（全図は裏表紙参照）。

ここで掲載するのは右隻のうち、富士山を中心とした部分。湧き立つ金雲の合間に霊峰が堂々たる姿をみせる。山麓には三重塔や宝形造の堂舎を擁する社寺が点在し、境内には桜が咲き誇る。前景の駿河湾に突き出す陸地が三保松原である。その先端に立つ、一際大きな木は、謡曲でもおなじみの「羽衣の松」であると考えられている。浜辺では人々が製塩を営み、海上には数隻の小舟が行き交う。駿河の長閑な春の情景である。

平成二十二（二〇一〇）年、三保松原が所在する静岡市清水区が創業地である、はごろもフーズ株式会社の御寄贈により、当館の所蔵となった。

（主任学芸員　浦澤倫太郎）

No. 136
2019年度 | 冬 |

芋づる式展覧会鑑賞法

館長　木下直之

雑誌『いもづる』の存在を教えてくださったのは、七年前に世を去った山口昌男さんでした。文化人類学者として東奔西走していた山口さんご自身が、それこそ各地各時代の一見無関係な事柄を芋づる式に引き出しては関連づけて、読者を未知の世界へと案内してくれました。

明治の日本社会に、とりわけ旧幕臣たちの陽の当たらない歴史にも強い関心を示されたことから、私もその謦咳に接することが出来ました。成果のひとつ『「敗者」の精神史』（岩波現代文庫）には「幕臣の静岡―明治初頭の知的陰影」という興味深い一章がありますが、その話はいずれまた。

ひょっとすると展覧会とは「いもづる畑」（同誌創刊号あとがき）ではないか、というのがここでの話題です。二〇一九年夏に開催した「熊谷守一―いのちを見つめて」展の会期中に、私は「熊谷守一の絵のはだかとヌードについて」と題して話をしたのですが、その準備の途中で熊谷のこんな言葉に出喰わしました。

ちなみに、若き日の熊谷はスポーツマンでしたから、映画「モリのいる場所」（二〇一八年）で山崎努演じた熊谷とはまるで違って結構いい身体をしており、「熊谷守一のはだかとヌードについて」話せばよかったと、後悔したぐらいです。「土曜と日曜は、画塾のお向かいの帝大に行って、工科の教室で石膏のデッサンをしました。帝大の工科には知り合いがいたから、特別に入れてもらえたのです。工科には、どういうわけか石膏がたくさんあって、デッサンの勉強にはこと欠きません。一日中あきもせずに、一人で石膏デッサンをやったものでした。」（熊谷守一『へたも絵のうち』平凡社ライブラリー）

まだ東京美術学校に入学する前、岐阜から東京に出て間もない十八歳の熊谷が本郷森川町にあった共立美術学院で日本画を学んでいたころの話です。「帝大の工科」とは東京帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）のことで、そこに石膏（像）がたくさんあったのはどういうわけなのか。

その答えは、秋に東京ステーションギャラリーで開催された「辰野金吾と美術のはなし」展で明らかになりました。一八七六年に開校した日本で最初の国立美術学校（工部美術学校）はイタリアから三人の教師を招き、本場の美術教育を実践しました。彼らが石膏像などの教材も日本に持ち込んで来たのです。ところが、学校はわずか七年で廃校、石膏像は工科大学へと受け継がれます。廃棄の危機からそれらを守ったのが工科大学教授の建築家辰野金吾でした。

熊谷が「工科の教室で石膏のデッサン」をすることが出来たのは、建築教育に石膏デッサンが組み込まれていたからです。当時、それを指導したのが工部美術学校に学び、その後イタリアに留学し、一八八三年にローマで辰野と知り合い、帰国後も親交を続けてきた画家松岡壽でした。

松岡にはコンスタンティヌス帝凱旋門を描いた油絵が二点あります。松岡の遺品に「ローマ古代遺跡発掘現場無料入場・研究許可書」（一八八一年）があり、留学後に、ローマ古代遺跡発掘技術局から入手したことがわかります（青木茂・歌田眞介編『松岡壽研究』中央公論美術出版）。

これを手掛かりに「芋づる」を手繰り寄せますと、今度は、同じく秋に当館で開催した「古代への情熱」展の会場へと足を踏み入れることになります。そのサブタイトルにあるとおり、「十八世紀イタリア・考古学と芸術の出会い」がイタリア式美術教育、いわゆる美術アカデミーを整備したからです。ルネサンス期以来、発掘された古代彫刻は石膏でコピーされ、デッサンを通して学ぶべきモデルとなりました。

イギリスでは貴族の子弟がイタリアを旅する「グランドツアー」が一世を風靡しますが、イギリスに留学した辰野が帰国を前にイタリアを訪れたことも、「グランドツアー」にほかなりません。辰野と松岡が出合うちょうど十年前にイタリアを訪れた岩倉使節団は、フィレンツェのウフィツィ美術館の印象を「凡ソ伊太利ハ美術ノ根本地」と述べています（『特命全権大使米欧回覧実記』岩波文庫四）。

こんなふうに無関係に開かれた展覧会の展示物の思いがけない繋がりは、そこを訪れた人だけが独自に発見する楽しみです。主催者はそこにまで思い至らないからです。

ちなみに、『いもづる』（以毛図流、いも蔓、以毛図流、以茂随流、いもづると表記が変遷）とは、一九二三年に斎藤昌三と加山道之助が創刊した趣味人の雑誌でした。刊行を重ねる中で、雑誌『趣味と平凡』（一九二〇年創刊）では同人だった斎藤と三田平凡寺が仲違いする様子が『いもづる』誌面から窺われます。平凡寺は「画は小林清親に師事」（斎藤昌三『三十六人の好色家』有光書房）、その清親こそ「幕臣の静岡―明治初頭の知的陰影」の登場人物のひとりです。平凡寺の展覧会を京都国際マンガミュージアムが準備中だと聞きますから、どうやら新たな「いもづる」が期待出来そうです。

移動美術展　開催報告

上席学芸員　野田麻美

当館では、開館以来、県内の施設で選りすぐりのコレクションをご覧いただき、当館のコレクションを身近に感じていただく機会として、ほぼ毎年、移動美術展を開催しています。

現在、当館のコレクションは約二七〇〇点に及び、常時開催している収蔵品展は、多くのご来館者からご好評をいただいておりますが、収蔵品展の展示室が一室のみのため、テーマを立てた収蔵品展一回につき、当館のコレクションのなかからご紹介できる作品は、一つのジャンルに偏ってしまいがちです。移動美術展では、会場によって、土地ゆかりの作家を特集するようなテーマ設定を行う場合もありますが、多くの場合、さまざまなジャンルの作品をご覧いただけるよう、工夫を凝らしております。今回も、会場の担当者と相談しつつ、当館のコレクションの幅広さをご覧いただけるように努めました。

今回の移動美術展は、二〇一九年十一月十二日から十二月一日まで、裾野市にある裾野市民文化センターで開催されました。本展は、「土・水―大地をめぐる美術」と題し、富士山南東に広がる裾野市の豊かな自然にちなみ、土と水をテーマとしました。本展では、当館の西洋画、日本画、日本洋画、現代美術のコレクション三十七点に、当館のコレクションのなかでも人気のある伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》のレプリカを加え、三十八点の作品を精選し、展示しました。

本展は、十一月十二日に開幕式が行われ、裾野市長、当館の櫻井昌明副館長らのテープカットが催されました。当日は、午後、筆者によるフロアレクチャーを開催し、初日から盛況のうちに終えることができました。

本展に出品された、アシル＝エトナ・ミシャロン《廃墟となった墓を見つめる羊飼い》のような西洋画の大作、田中保《セーヌの宵》をはじめとする日本近代洋画の優品の数々、石川直樹《Mt. Fuji》シリーズのような、近年制作された現代美術のフレッシュな作品など、バラエティーに富んだ作品のラインナップは、多くのご来場者の方々にご好評をいただきました。また、会期中、展覧会に合わせ、伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》のレプリカを撮影し、SNSでご紹介いただくことで、先着で展覧会特製プレゼントを贈呈するキャンペーンを行い、こちらも参加者の方々にお楽しみいただきました。

図1　開幕式の様子

十一月二十三日には、木下直之館長による講演会「富士山裾野をめぐる美術について」が行われ、翌二十四日には当館ボランティアによるギャラリーツアーが催されました。ご参加いただいた方々には、これらのイベントを通じ、当館コレクションの魅力をご堪能いただきました。

本展にご来場下さった皆様に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。来年度以降の移動美術展においても、当館のコレクションをより一層お楽しみいただけるよう、いろいろなアイデアを練っていきたいと思います。

図2　会場写真

やなぎみわ展
神話機械

2019年12月10日（火）～
2020年 2 月24日（月・振休）

前号に引き続き、「やなぎみわ展 神話機械」についてご紹介いたします。前号では、本展の概要について述べましたので、今回は、一部に話題を絞ってやなぎ作品の魅力に迫りたいと思います。

前号では、老木に実る桃を撮影した新作の写真シリーズ〈女神と男神が桃の木の下で別れる〉や、演劇に関連した新たな試みである、アートと機械が融合した《神話機械》、〈エレベーター・ガール〉を始めとする代表的なシリーズについてご紹介しましたが、それら以外にも本展でぜひ注目していただきたい作品があります。

やなぎ氏は、その写真作品が最もよく知られていると思いますが、写真作品だけでなく、映像作品も制作しています。本展で出品される新作の《桃を投げる》（図1）は、桃を撮影した写真作品〈女神と男神が桃の木の下で別れる〉シリーズと関連した映像作品で、写真作品と同様、日本神話をイザナミとイザナギの逸話を題材としたものです。

本作では、出演者が頭部にカメラを装着しており、桃を投げつけられるイザナミの視点で撮影されていると言えます。ジャグラーである出演者は、暗闇の中、手足を使って移動し、転がってくる桃を自在に操ります。主観的な視点の映像であり、スピーカーから息遣いが聞こえることも相まって、その驚異的な身体性が生々しく感じられます。また、この映像は《神話機械》の展示空間に隣接する小さい展示室に展示を予定しています。本作が、〈女神と男神が桃の木の下で別れる〉と《神話機械》の作品間の結びつきをより明瞭に示してくれることでしょう。

映像作品について他にも言及すると、〈フェアリー・テール〉シリーズに含まれる映像インスタレーション《砂少女（SAOTOME）》（図2）も出品されます。〈フェアリー・テール〉の写真作品には、古今の物語を元にした光景を写したものと、荒野のような背景の前にいる、テントを被った人物を写したものがありますが、本作は後者をモチーフにしています。

本作は、中空に黒色のテントが吊り下がり、その中に入って映像を鑑賞するという仕掛けになっています。映像自体も、テントの中から外を覗いている人物の視点で撮影されており、鑑賞する人は、テントの中にいる人物になったように映像と向き合うことになります。カメラはほぼ定点で動かず、二場面あり、それぞれの場面で登場人物と遭遇します。

上記では、やなぎの映像作品における主観的な視点について述べましたが、やなぎ氏がこのような撮影方法をいつも採用しているわけではありません。それ以外の映像作品でも様々趣向を凝らして制作されているので、鑑賞される際は、映像の撮影方法や展示の際の設えなど、様々な点に注目していただくと、作品の楽しみが深くなると思います。

やなぎみわ展は、当館を含む五会場が共同で準備してきたもので、当館がついに最終会場となります。この機会をどうぞお見逃しなく。

（主任学芸員　植松　篤）

図1　やなぎみわ《桃を投げる》2018年　作家蔵

図2　やなぎみわ《砂少女（SAOTOME）》2004年　IZU PHOTO MUSEUM蔵

開校100年
きたれ、バウハウス
―造形教育の基礎―

2020年４月11日（土）～５月31日（日）

一九一九年、ドイツの古都ヴァイマールに、建築家ヴァルター・グロピウスにより造形学校バウハウスが開校されました。バウハウスでは、ヴァシリー・カンディンスキー、パウル・クレーなど時代を代表する芸術家たちが数多く教師として指導にあたり、優れたデザイナーや建築家が育ち、時代を切り開くプロダクトデザインやグラフィックデザインが生まれました。実験精神に満ち溢れたこの学校は、造形教育に革新をもたらし、活動期間はわずか十四年と短命でしたが、今日にいたるまでアートとデザインに大きな影響を及ぼしています。来年度春に当館で開催する「開校一〇〇年　きたれ、バウハウス　―造形教育の基礎―」は、二〇一九年がバウハウスが開校されてからちょうど一〇〇年にあたることから企画されました。二〇一九年八月に新潟市美術館で立ち上がり、西宮市大谷記念美術館、高松市美術館、静岡県立美術館、東京ステーションギャラリーの順に全国五会場を巡回します。

昨年から今年にかけては、世界各地でバウハウス開校一〇〇周年を記念した展覧会やトークイベント、映画祭の開催、関連する本や雑誌の発行、商品やグッズが発売されるなど祝祭ムードが高まっています。二〇一九年九月に本国ドイツではデッサウに新しくバウハウス美術館（Bauhaus museum Dessau）がオープンしました。筆者は昨秋にアメリカのシカゴに訪問する機会がありましたが、シカゴは、バウハウスの最後の学長を務めたルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエが、ナチスの弾圧を受けてバウハウスが閉校した後、教え子たちの支援を受けて、アーモア研究所（後にイリノイ工科大学）の建築学部長として招かれた地。同じく、バウハウスで教鞭をとっていたラースロー・モホイ＝ナジが渡米後に「ニュー・バウハウス」を開設したのもシカゴでした。バウハウスと関係の深い土地であることから、イリノイ工科大学では「Shapeshift 2019：シカゴのバウハウス」が、シカゴ美術館では「Weaving beyond the Bauhaus」が開かれ、バウハウスの理念がシカゴを拠点にしたアメリカで継承され展開していく歴史をうかがい知ることができました。こうしたバウハウス一〇〇年を記念した催しは、https://www.bauhaus100.de/（バウハウス一〇〇年を祝うドイツの公式サイト）または、http://www.bauhaus.ac/bauhaus100/（日本国内の公式サイト）でも紹介されています。

「開校一〇〇年　きたれ、バウハウス　―造形教育の基礎―」では、学校としてのバウハウスに焦点をあてます。とりわけ、入学した学生が最初に受ける基礎教育で教師たちが試みた授業を中心に、各教師の授業内容を紹介するとともに、その一端を体験していただくコーナーを設けます。さらに、基礎教育を終了したのちに進む様々な工房（金属、陶器、織物、家具、印刷・広告、舞台・建築）での教育の成果や資料など約三〇〇点を展示します。

また、当時、実際にバウハウスに入学した日本人留学生、水谷武彦、山脇巌、山脇道子、大野玉枝の四人の作品・資料を一堂に集めて紹介し、バウハウスと日本のつながりをご覧いただきます。

歴史に燦然と輝くバウハウスに、体験入学するような気分で、展覧会をお楽しみいただければ幸いです。

（上席学芸員　川谷承子）

製図の授業（ロッテ・ベーゼ）
制作年不詳
ミサワホーム株式会社蔵

マルセル・ブロイヤー
サイドチェア B32　1928年
ミサワホーム株式会社蔵

和田英作《松林（下絵）》と岩崎彌之助高輪邸舞踏室

上席学芸員　泰井　良

はじめに

和田英作《松林（下絵）》（当館蔵、図1・図2）は、岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画のための下絵と考えられる。しかし、本下絵及び壁画が、どのような意図で制作されたかについては、未だ不明な点が多い。

一九〇八（明治四一）年に竣工した岩崎彌之助高輪邸（現・三菱開東閣）は、建築家ジョサイア・コンドルによる邸宅建築の最も優れたものとされ、内装のデザインにも工夫が凝らされた。なかでも和田英作が揮毫した二階舞踏室の壁画・天井画は話題を呼び、竣工後、「舞踏室は、壁面天井共仏国式の油画を描いてあるが、之は彼の有名なる和田英作氏の筆で三保の松原を描いてある」と報じられた。[1] 残念ながら建物は一九四五（昭和二〇）年の戦火で焼失し、和田の壁画・天井画も失われた。

本小論では、「和田英作が手掛けた建築装飾」、「岩崎彌之助、コンドルと和田英作との出会い」、「岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画建設の経緯」について記し、改めて、本下絵及び壁画の制作意義を考えてみることとする。

図1　和田英作《松林（下絵）》1906年頃
紙、水彩　67.4×101.4cm　静岡県立美術館蔵

図2　和田英作《松林（下絵）》1906年頃
紙、水彩　67.4×77.0cm　静岡県立美術館蔵

一　和田英作が手掛けた建築装飾

和田英作は、一九〇三（明治三六）年のヨーロッパからの帰国後、公的なものと私的なものとの違いはあるものの、多くの建築装飾を手掛けることになる。一九〇五（明治三八）年に制作された渡辺千秋伯爵邸天井画については、長らく和田英作の手によるものとされていたが、日本女子大学・手塚惠美子氏の調査・研究によって、岡田三郎助の作によるものと判明した。[2] そのため、岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画・天井画は、和田が手掛けた最初の建築装飾となる。

・一九〇八（明治四一）年
岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画・天井画
・一九〇八（明治四一）年
交詢社演芸室の壁画（洋画家五名で分担揮毫）
豪華客船天洋丸・地洋丸の装飾画
・一九一一年（明治四四）年
帝国劇場観客席上部の天井画・食堂壁画
・一九一二（大正元）年
慶応義塾創立五十年記念図書館（現慶應義塾図書館旧館のステンドグラス原画）
・一九一四（大正三）年
東宮御所喫煙室（現・迎賓館赤坂離宮東の間）壁画
中央停車場（東京駅）帝室用玄関の壁画
・一九一五年（大正四）年
日光東照宮宝物館壁画
・一九一七（大正六）年
開港記念横浜開館壁画

このように、和田の建築装飾は、ヨーロッパ帰国後から約十五年間に集中している。この時期は、日本が日清・日露の二つの大戦に勝利し、国力が高まり、政治・経済が安定したことで、国内で建築が盛んに行なわれた時期であり、「大正デモクラシー」とも重なる。和田は、この建築ラッシュに乗じて、国内に油彩画を普及するべく作画活動を活発に行なったと考えられる。なかでも、羽衣天女を題材とした帝国劇場天井壁画は、和田が最も力を注いだ力作といってよい。

「一體壁畵は元々純装飾畵であるから、普通の繪畵とは大分調子を異にしてゐる、遠近なども餘り附け過ぎると奥深い感じがして、却つて觀者を不快にさせる。色彩も室内の光線と調和して飽くまで心地好いエッフエクトを與へるようにせねばならぬ。構圖に就いても事物を總て穏やかに按排好く並べる上に苦心を要する。天井に描かれる人物の如きも餘り大き過ぎると落ちて來さうな感がして、觀者に不安の感を與へる。又舞臺に出る俳優が小さく見えるといふ弊がある。これらの事に就いては、私は出來るだけの注意を拂った。

何しろこれだけ澤山の人物を使った洋畵の壁畵は、我國に於いては今度が初めてなので、それは隨分骨も折れた。

下圖を附けたのは昨年三四月の頃で、六月からは劇場内に建てられた假畵室内に楯籠り、寢起きまで多くはそこでやつて年末まで仕事に從事した」。[3]

和田は、大変な演劇好きで、自ら戯曲を書くことや舞台美術を手掛けることもあり、一時は赤坂溜池の演技座に通いつめるほどであったという。そうした経験が、帝国劇場の天井画制作に資するものであったことは言うまでもない。

二　岩崎彌之助、コンドルと和田英作との出会い

岩崎彌之助とコンドル、和田英作の三人は、どこで出会ったのだろうか。筆者は、その出会いの場は、明治美術会であったと考える。明治美術会は、工部美術学校出身の洋画家たちを中心に、国粋主義（ナショナリズム）の台頭に抗するため、約八〇名の洋画家たちが、大同団結して結成された我が国初の美術団体である。

ジョサイア・コンドルは、一八八九（明治二二）年に明治美術会が結成された際に、最

初の外国人会員として名を連ねている。[4]

一方、和田英作は、明治美術会第四回展（明治二五年）、同第五回展（明治二六年）、同第七回展（明治二八年）に作品を続けて出品しており、その活躍ぶりが伺える。

岩崎彌之助は、明治美術会名誉会員であり、三菱の「大番頭」と呼ばれ、後に三菱一号館の建設を実質的に主導した荘田平五郎も、明治美術会賛助会員となっており、岩崎彌之助、荘田平五郎、ジョサイア・コンドル、和田英作は、この明治美術会を通じて知己を得たものと考えられる。[5]

三　岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画建設の経緯

一九〇〇（明治三三）年、彌之助は母の薦めもあって、初代梅若実に師事し能の仕舞を習い始めると、のめり込み、仲間たちと「鷲鳴（おうめい）会」を結成。各会員の家で月例会を開いていた。そこで、高輪邸を新築するにあたり、自分が最も好んでいた謡曲「羽衣」を舞うにふさわしい舞踏室を設けようと考えた。[6]

彌之助は、コンドルを通じて、和田英作に壁画の下絵制作を依頼した。以下に、木村荘八の問いに答えた和田の話から、壁画制作の経緯について引用する。[7]

「下絵は色々と作つて見ましたが、謡曲の「羽衣」に画題を採つたものがよかろうということになり、いよいよ其下絵にかかることにしました」

「各個のパネルを一の連続した壁画と見做し、之に三保の松原らしい景色を描くことにしました。」

「空には鶴の舞うのを仰ぐなどといふやうな構図であります。」

「私は稲毛海岸のあの潮風に年を経た松が一番ふさはしいやうに思ひまして、稲毛の海気館といふのに宿をとつて下絵を作りました。その間毎日の様に学校にも出勤し乍らですが、約八ヶ月も居ました。」

「いよ〳〵本物を描くことになつて、この宿では不便なので、幸ひ同じ海気館の地所内にあつたビゴー(Bigot)の建てた画室を借りることに致しました。」

下絵は、和田自身が「下絵は色々と作つて見ましたが、謡曲の「羽衣」に画題を採つたものがよかろうということになり、いよいよ其下絵にかかることにしました」と語っているように、鹿児島市立美術館が所蔵する下絵も含めて、何案か存在しており、その中から、「松林」の下絵が選ばれたものと推察できる。

また和田は、舞踏室の松林を描くにあたり、三保松原ではなく、実際には千葉の稲毛海岸の松林を写生し、和田ならではの自然主義的な作風でモティーフを堅実に描いた。なお、手塚恵美子氏は「静岡県立美術館所蔵の《下絵（松林）》二点のうちの一点は、画面上部の図様が完成後の舞踏室写真に写っている北側壁画とほぼ一致しており、コンドルの設計図面をトレースした上に描いた最終段階の下絵であったことが分かる」[8]と述べている。

能舞台の影向の松さながらに、舞踏室の東西南北の壁面をすべて松林で取り囲み、コンドルの洋風建築と彌之助の「羽衣」が、見事な「和洋折衷」の効果を生み出すはずであったが、彌之助は、舞踏室の完成を待たずこの世を去ることになった。

おわりに～岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画・天井画の意義～

岩崎彌之助高輪邸は、深川別邸、駿河台本邸と同様に、ジョサイア・コンドルによる優れた邸宅建築である。また、岩崎彌之助とコンドルは、三菱一号館に代表されるように、東京の近代化のシンボルともなる建築を手掛けている。これらの建築空間は、オフィス・ビルや住居という単なる「実用性」のみを目的としたものではなく、二人は「文化的な空間」を意図していたと考えられる。

和田が壁画を描き、彌之助が「羽衣」を舞う予定だった舞踏室、ここに招かれることになるはずだった「鷲鳴会」のメンバーは、豊川良平、近藤廉平、志村源太郎、加藤高明（後の首相）、荘清次郎、末延道成など当時の貴族院議員といった錚々たる人々であり、岩崎彌之助が、ここを「文化サロン」と見立てていたことは十分考えられる。

また和田英作は、その後、三菱長崎造船所が建造した当時日本最大の客船天洋丸（一万三〇〇〇トン）の一等船客ロビーに掲げられた三保松原の絵を描き、「謡曲羽衣に材を取つた」帝国劇場の天井画を手掛けている。そして、一九五一（昭和二六）年、三保松原、羽衣天女に魅了された和田は、清水・三保に画室とアトリエを移すことになる。つまり、高輪邸舞踏室の壁画制作は、和田にとっても、三保松原と羽衣天女というモティーフに取り組む原点となったのである。

1　「故岩崎男の高輪新邸」『建築雑誌』一九〇八年四月二五日、四八頁
2　手塚恵美子「和田英作と装飾美術について」『横浜市開港記念会館講演会』二〇一八年五月
3　「新たに成れる帝国劇場 ～天井および食堂の装飾畫」『美術新報』第十巻第五号 一九一一年三月一日、二五頁
4　『明治美術会第一回報告』一八八九―一八九〇年、十一頁
5　『明治美術会第七回報告』一八九〇年、六頁
6　原徳三「岩崎家と開東閣の一〇〇年」『岩崎彌之助高輪邸・開東閣』二〇〇八年、一三九頁
7　「諸家問答　デッドマスクに残る髪の毛―稲毛に在つたビゴーの画室の話―（答）和田英作」『美術新論』第八巻第六号、一九三三年六月、八八―八九頁
8　手塚恵美子「和田英作と装飾美術」『鹿島美術研究（年報第二四号別冊）』二〇〇七年、一九二頁

※本稿執筆にあたり、原徳三氏と手塚恵美子氏にご助言を賜りました。記して謝意を表します。

本の窓

トーマス・トウェイツ 著
村井理子 訳
『ゼロからトースターを作ってみた結果』
新潮文庫（シ-38-22）、二〇一五年

著者が英ロイヤル・カレッジ・オブ・アート大学院の卒業制作として行なった、「トースター・プロジェクト」の記録です。「消費文化の象徴である」トースターを、文字通り原材料から製作することで、その背後にある社会のあり方やシステムを描き出そうとするもの。と、書いてしまうと堅苦しいのですが、専門家に半ば呆れられつつ助言を受け、鉱山を巡って銅、鉄、ニッケル、そしてゴミ捨て場を漁ってプラスチックを手に入れる様は、笑いの涙無くしては読めません。これが「アートワーク」なのか、と言われると僕は答えに窮するのですが、面白いことは間違いありません。こういう作品、というか仕事は、日本の大学で卒業制作になるのかしらん。お奨めします。

（上席学芸員　新田建史）

職員生活のスタートは美術館から

総務課総務班　主事　高柳智穂

四月から新規採用職員として県立美術館に配属になりました。

大学時代に学芸員課程を履修しており、美術館や博物館へ足を運ぶのが好きだったということもあって、美術館への配属を聞いた時は、驚きと嬉しさで胸が一杯だったことを鮮明に覚えています。今はまだ慣れないことが多く、時の過ぎる早さに焦りを感じることもありますが、充実した毎日を過ごしています。

博物館実習を経験したうえで実際に職員として働いてみると、実習で取り組んだことは、博物館を運営するうちのほんの一部分でしかなかったことに気づかされます。展覧会に関わる仕事はもちろんのこと、会計事務やイベントの補助等、業務内容が多岐に渡ることには驚かされました。学生時代によく見ていたミュージアムサイトに展覧会情報を掲載したり、広報物を発送したり、美術館情報を発信する側に自分が立っていることには未だに少々不思議な感覚を抱きます。

クイズラリーで配布した缶バッチ

クイズラリーのブース

色々な業務を経験するなかで心に残っているのは、十一月に開催されたロダンウィークです。人々で賑わう館内外の様子や友の会、ボランティア、地域の皆様がイベントに参加しているところを見て、県立美術館は多くの方々に支えられ、運営されていることを実感しました。

個人としては、「古代への情熱」展に関連したクイズラリーの企画に関わり、準備や当日の接客をおこないました。笑顔で足早に解答を持ってきてくれた子どもたちや嬉しそうに缶バッチを選ぶお客様の様子を近くでみて、企画に少しでも関わることができ、良かったと感じました。お客様と話したり、展覧会をご覧になる様子を近くで見たりできたのは、美術館で働くうえで非常に勉強になりました。普段、お客様と直接関わることは多くありませんが、現場に出ないとわからないことが沢山あると感じたので、今後は館内外へ積極的に足を運び、仕事に生かしていければと思います。

行政職員として県立美術館や展覧会がより良いものとなるよう精一杯尽力するとともに、自分なりの視点で美術館の魅力を発信していきたいです。これからよろしくお願いします。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休 館 日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」県大･美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡I.C.、清水I.C.から約25分　日本平久能山スマートI.C.から約15分
◎新東名高速道路　新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象　6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422－8002　静岡市駿河区谷田53－2
総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学芸課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

右隻

左隻

表紙の作品
《富士三保松原図屏風》

2020年度企画展年間スケジュール

開校100年 きたれ、バウハウス
－造形教育の基礎－
4月11日(土)～5月31日(日)　45日間

静岡県立美術館名品展（仮）
6月13日(土)～6月28日(日)　14日間

みんなのミュシャ展
7月11日(土)～9月6日(日)　51日間

富野由悠季展
9月19日(土)～11月8日(日)　45日間

収蔵品企画展
11月21日(土)～1月11日(月･祝)　41日間

ムーミン展
1月23日(土)～3月14日(日)　44日間

※展覧会名、開催期間は、いずれも予定であり、変更となる場合があります。

友の会のご案内　入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.136　編集発行：静岡県立美術館　2020年1月3日　印刷：文光堂印刷株式会社